遠笠懸之次第

一 笠掛馬場の寸法外埒東西八十間余南北二十間
馬場の内六十間迄四尺之中に土居を築菱垣を
結也

一 疏深さ六寸底さ弐尺廻り壱尺八寸的也壱尺
守傳馬場中より矢道迄三十三枚ましる
二十七枚矢道より馬場末迄十九枚又の二十五枚
惣〆弐十二枚馬通所疏へ入組石を出底く
是へし馬場末も同前也是ハ歩射ニ笠掛

を射候さたる也

一 流のうち馬是文字式ニ檜なく高さ三尺六寸に埒を結也左右ともに二尺八寸也結埒指埒口傳 矢道又間の間也埒なし馬ハよふ年縄を張へし高さ三尺幅とさ八寸巳り乃杭を九本打杭の頭を矢留而繩を持労解を本ニ結付候也

一 あつち長さ總より九枚高さ七尺四寸上七尺下

一 あつち高さ縄より九杖高さ七尺五寸上七尺下
九尺余後へ六尺余筏の形に築也

一 矢道は間の内的の際まて也砂を敷矢落
に寄方計間半程芝を敷也

一 砂の内縄の方の芝際より左右の際迄横に縄を
引こつに折て折目二つの所より芝より一尺斗
的の方へよせ霞塚を築へし又射場の方の芝
きわよりあつちの後の垣迄高さ弐尺余に竹
垣を結也委く口傳

一 的の寸の疏ハ的串より九尺余弓場の方へ九尺
四方に十五間に切也

一 矢取所ハ的串より九尺斗ひらき左右ニ高サ
三尺横三尺厚サ二尺八寸に芝ニて築也

一 的幕ハ布六間長サ五尺六寸上ニ連乳六ツ付浅黄ニ
染下二尺四寸縫まわし裏ちらを付垜より一枚余
廻るなり

一 的串ハ竪六尺五寸地より上五尺横六尺の内法

一的串石竪六尺五寸地より上五尺横六尺の内法

五尺左右へ出形分三寸宛又五寸あまり口傳在り

径壱寸五分黒塗也本式也但角ありともよし

一的寸法壱尺八寸又八寸の的檜あく行しあり組あり

あり星も出るもよし口傳競書古来あり半波を用ひ

檜用也

一 弓弦縄白麻綿也寺旁中之紐口組ニ

一 同張ケ地際六寸ニ定光ヲ掛 双左右ヘ張詰也

弓ニ射附毛前後より弓之射と言也

一 的場の前の方ニ据菱を設へ一日記所の役目記并硯

料紙を文臺の上へ置数壌ニ向ひ着座 唯射候ハ

弟綿を持同席ニ矢中ハ矢落の為ニ振々旗を持

引ケ射を当射 唯旗を合検見に当射時検

見旗を合 射手ニ中を告知らする也

一 懐菱の席ニ八之神の幣を立 御物を役人文錦二…

弓旋を合 射手の中をさらしむる也

一 横笈の庭の八ヶ神の幣を立法物を彼の文餅二之
座て数宜为宜鋰鞬子を结宜也外ニ基目を
飾事等ニ口傳

一 横笈射手小屋馬屋ニ乗細別紙絵圖ニ聴ニ也
委ハ書上巻ニ記

一 矢渋法の矢射的ニ阿より為射矢串より立へ也まる
入弓射ニ論の時検見馬より下皆を射さ左手に
弓の弭の上を持弦を左へかし 捻寄て 右手を添的

のト前後の串に弦を當に押當弦に懸りたるを
中也かりは離矢悪くはと云から是ハ非也かりは定
悪浦はと云なり弓杖より離りて落る矢は
十文字の横点を流し危し前のごとく的串の根に
弦を押當たる矢にて押付筈を弦の外に出して
筈を走る悪くを通を流まて矢の方へ弦を返し
見へし弦にかゝらハ中から離さる時は非也何と矢が弦の
時ハ末筈を馬場末へ向へし是庶凡物も同事也

一
撿見なきと紀ハ射手の内古実ハ好き人が法

時ハ末筈を馬場末へ成へし弟廉丸物も同事也

一　検見なきと紀ハ射手の内古実ん好する人沙法まへし又手全沙法ある支なり

一　矢沙汰を致人ハ馬場本の埒の通に控へし时宜によるへし

惣射手并寄前埒の通二三杖の間馬場末の方也見物也

一　はりあるを云又鉄矢と云論の时ハ引目の鹿をもへし

矢ハ立なる所に背又内へ入ものハかりする矢なり

埒をこえハ沙汰にも及埒の通に仆る射の事也

一 絶中ニ落テ弦矢成ト云ハ的ニ中テ串ヲ越
テきしは死箭也

一 上ニ中落ヨリ上ヘ流レ縄ニ中ルハ悪矢也捨へし

一 絶中後腰ノ横串ニ引目何ヨリ落ルハ悪矢也捨へし

一 簓の中縁ノ何ヨリ下ヘ落ハ絶矢也

一 中ニ弦矢流レなはニ悪ル事又者少悪ヨリ上ル
絶矢也又弦の上下ニ中テ弦ヲ越落共亦ニ横縄ニ当ルハ
悪キ矢也 ニ悪ト斗也

一 的ニ上ニ中ヨリ上縄共ニ切矢串の通ヲ越モ忌也

一　的にハ中よりさきを縄にて切矢串の通を定て名も
矢也よりかくる弓取か〻りて例式の沙汰の矢成へし
一　弦に中矢ありとも又引目にても何れも望
一方より的の前にあり一方ハ布革にて中にハ中ハ
本也折後へ行も物にあたるハ絶矢也定とい本
的の前より折苦の方ハ的より前にあたり引目
の方後へ行も布革串にあたるハ絶矢也前引
目のうへ弦より前にあたり矢弦の後へ行も物に

何とし候事也

一 矢取にて候ときハ中に射る矢かとまる矢か
見へて候取ときハ我にて射とる取か能也 射手は
定器を待へし 女の文ハ矢の名残ともとまる射也
串より余り候取ハよし 後よりとく返し候へし
勝負の時ハむさと矢を立とまる矢ニハ串を
立て射る矢也

一 同的の前を通へからす弓と山形の間を通へし 又ハ垜の
後を通るへし

一　同的の前を通へり又ハ弦と山形の間を通へり又ハ垜の後を通るへし

一　日記并控帳ニハ番外をも書記へし

笠掛射手

射手	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	中
松井総渡守	○	○	◎	●	○	●	○	○	○	○	八
原田兵庫助	◎	○	○	○	○	◎	○	○	◎	○	十
山崎隼人	●	◎	○	●	○	○	○	○	●	○	七
大舘肥後守	○	○	●	○	◎	●	○	●	●	●	五
樋井左京亮	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	◎	●	九

山名上野助	武田五郎	京極閑清	守山大蔵	林田藤平次
●	○	●	●	○
●	○	●	○	○
○	○	○	○	●
○	○	○	○	○
○	●	○	○	○
○	○	○	●	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
●	○	○	●	○
●	○	○	○	○
六	十	八	七	九

年号月日

一 鬮定の時ハ馬場にて鬮を筒ニ入振渡之
馬ニ乗なから請取右の名ニ紋をしるし返す也

入道ハ行騰の緒ニさし置射果馬場末ニて呼出鬮

入道ハ行縢の諸ニさし出射果馬場末ニて皆以闕

かくて同時射手闕の数ニ応してを召上て日記ニ法也

射手各冠を渡し馬場本へ歩使として闕を筒ニ入

又馬場本ニて前のことく振渡也其度〻を同前冠を

振廻儀を兼渡事ハ春堂の役也

一 冠長寸斗あり細く中ニて羅ニ第の竹のことく

削也四ヶ又四季の文字ニを給候ニて一二三四ヶて

一 射範十騎ニハ文書用意有へし

春一　夏二　秋三

一 勝負の時ハ一ヽ二ヽ三ヽ四ヽ五ヽと圖をたて一ヽの射手射中て二ヽ三ヽ四ヽ五ヽの射手ハ一人宛中たるべき為一ヽの勝也又二ヽめ三ヽめも射手向ひ一番ひ中てさせ付る持に成也 口傳

一 七騎九騎十騎の時ハ落ありたちハ二人分に成也右射手の内に矢有て矢放さる射手何ハ其の射手ハ多落の射手也又落なき時矢何ハ其

射手ハ落に成也其外ハ子細なし勝負なき時は
闇又重に及也

一 七夕笠懸ハ七度射也何も中りハ十に准

一 射流射手と云ハ十を射へき射手の上の定也十番の
笠懸に九度当て矢一ツになる時ハ敵方の矢を射
外中也是貴人に十を射させ申へき用捨なり
是を射流と云也

一 七夕笠懸ハ六度当て七度めを射流也
七夕笠掛射手

御方御所様 ○○○○○○○ 十

細川淡路守 ○○○○○●● 五

赤松彦次郎 ○●●○○●○ 四

伊勢七郎 ○○○○○○○ 六

小笠原八郎 ●○○○○○○ 六

伊勢次郎 ○●○○○○● 五

細川右馬守 ●●○○●●○ 三

小笠原民部少輔 ○●○○●○○ 五

伊勢左京亮 ●○○○●○● 四

小笠原民部少輔 ○ ● ○ ○ ● ○ ○ 六

伊勢右京亮 ● ○ ○ ○ ● ○ ● 四

布施弾正忠 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● 六

文明九年七月十七日

笠掛射手

御方御所様 ●一 ○五 ○三 ○三 ○四 ○五 ○一 ○五 ○三 ●五 八

小笠原八郎 ○三 ○三 ●一 ○五 ○二 ●五 ○一 ●五 ●一 ○四 六

伊勢七郎 ●一 ○五 ○一 ●四 ○三 ○四 ○二 ○四 ○三 ○一 七

小松孫治郎 ○四 ●二 ●五 ○一 ●四 ○三 ●二 ○四 ○一 ○二 六

細川右馬頭	○五	○一	○二	○五	○一	●に	○三	○三	○二	●一	七
布施弾正少弼	●に	●二	●三	○二	●二	●一	○三	○二	○に	○三	五
伊勢右京亮	○三	●に	●二	○に	●三	○二	○五	○二	○五	○に	五
小笠原民部少輔	●五	○に	○五	●三	○二	○五	○三	○二	○三	○五	六
伊勢次郎	●二	●三	○に	●一	○五	●二	○に	○一	○五	●二	五
細川淡路守	●二	●一	●に	○三	●五	○一	○に	○一	○に	○三	五

文明九年八月二日

右日記射儀組假之字を下有之也三人異人様

御前ニハ用捨之色ノ内々の時ハ所名字所名名

御前にてハ用捨ミ為し内ゝの時ハ片名字片名名
乗わとも書へきや口傳

一 籠手指候ゆくゝは弦を懸し結く前の弦を結へ巳し
肯通ゆく結ひ一つの結を渡かみく引とさね結ひ之口に
組ゝ末の長き結ゆく組ゆく末ゆ大指を両二つ三つ巻
く指を抜その跡へ結の餘を入両ゆ也結の長サ寸許
高太の書ゆハ寸ハ長もく馬を乗まてゆき高世ハ左右ゆさし
く聚し二寸計くしミ云也
後ゆく両又左右横ゆし其報也

一　力留楔皮を細く三尺斗ニ裁二ツニ折わめニ締をつく
粟殻近通し皮さ記をとしるへ入かうわの方乃目
貫のようなし　結留也同又皮の広さ五寸長サ一尺斗ニ
裁ニ端鞘の入程宛を前鞘を通しかうちの
下近通し同貫の如なし　二ツニ分り二重巴しむすひ
留也又下緒なしを留る也

一　鞢皆寸法形の径二寸四分　胃十六本長サ七寸組縁
三ツ形を黄紙なし　張地を青赤白黒なし　一間

宛色を交合張地を引裏を紺布なし　二間宛

宛色を交合張地を引裏を練布にし二間宛
張縁を表へ張寄也跡をハ丸く切て張色し

一 同上の裝束向き袖り縮を中程分長等先を叙
形に切て三ツ本をこち跡の表中に高く三方へ下け

一 中行を三所宛閉付也

一 三方へ下りを表縮の跡一所叙形中一所合七所
文色の糸にしひきを縫付也

一 縁に文色の糸にし一ツ指のあきをこさけにて閉付也

又色の糸を壱寸に切二つに折合ひに閉付也

一 総の作候輪の梅花房のことし也

一 左右の縁に総を身上にし結合也 是を笠の羽と云

一 書矢代長サ一尺二寸 廣サ二分上九分下六分 名字官を
書也 是を手板とも云 数十用ゆへし

一 新笈背をハ裏を去りて縫くゝりて也とも用ゆへし

一 引目矢ハ竹弓に鏑羽にて也 黒鏃にて一露挟羽

一 又ハ交細鏑箆焦し箆を焦へし

一 引目長サ寸六分又ハ四寸周ハ三寸に明ケ也 周柱ホ象牙也

又ハ吏銅拭篦焦し篦をさすへし

一 引目長サ二寸五分又ハ二寸目ハ三方ニ明ル也目柱ハ象牙也

入捻糸にて二所巻塗也

一 引目ハつ皮にて縫て持へし

一 矢標ハ羽中篦中又ハ納巻を忌ずして巻ものも能也

一 矢束筈ハ康苑院殿の此引目の柄ヨリ附之にて

尤く紀を志けるを世俗法の中ニ云ゆるましき事也

一 卸き目ハ實朔ニより既取る通る引目の音面白くく
ひしきめを射しまし也本式ニなき事也

一 引目をあてむるといふハ新發墓目を射て試る也大
めしハ射あ見ることゝ也

一 墓目の中ニある音を色つしと云ゆるを伺りとへて
云ゆのときと同し

一 引目射落事ゆゝハ馬を通して別の矢を取りて

射色しひしきくし後抜ニしハ矢を指て射し可ゐ

一 引目ゆかけ落支候ハ馬を通しつゝ別の矢をもちいて

一 射急しひらくくゝ後抜させハ矢を指もちいし弓ゆ
打添一通るへし

一 矢放時引目ゆかけ的ゝ中る事らハ小的ゆ切落さの
ゆかけをそのまゝ射るゝ時も中也能矢さへさゝ

一 ひらき出て思ひ外に矢を打落さらハ馬を振て扇取へ
歩向り給矢を打て射へし流れて初心の射手も
馬之人も支なしもハその德をも要もへし

一 落出もうし用也 又ハ落馬の時矢放て取時ゟ払

の射手ニ射也一十庭ニと云事一的ニ射懸し是ハ
内々の稽古なとの時の事也清の時又ハ勝負の時ニ
云ゝ事也

一 小人ハ先流鏑を稽古有へし騎射ニも笠懸を
笠ニむくさき馬をとりて入る所より矢さしをしてく射
庭し

一 矢放所ニて馬つよく流鏑を矢合なくより諸くく
渡り笠馬の事ニ云人あり是ハ悪補馬也ぬけ是を

むしろ笠と云ゝ馬場本より同是也きを笠馬と云なり

むかし継と云ハ馬場本より同足ましきを継馬と云なり

一　馬切流より之へかゝる度あり矢入てひき出さぬ時も之度迫ハ矢を指弛して馬場本へ帰りて射へしもし引しき出して参りしを縦流へ押入てひきさく射へし射法色くまかくハ矢を指弛して弓を添通へし

一　矢根ある馬にハ扇をさして打入ぬ前に矢番へし流へ出てハ矢番ることなきもの也矢根ある馬にハ何之恐

流鏑馬ニ限と云事也

一 馬のかしらをひきかきと云ハ笠懸ニ限云事なり
ひきかく能と云事なり

一 乗馬にて射時ハ上手のする也きや 馬にて射ハ
下手のする也云義ニてもきや 馬出好之人ニ尋ね
とむ也

一 馬の髪を馬場にし射へくは小尾にし射へし

一 髪切たる馬にて射時ハとめく あらし あとにひかみにて

大庭にしかも射へし

犬追物にてハ矢ハ射へし

一 馬場なとにて自然主人貴人の馬鞍ニて射まさハ
沓を脱鞍を載て置ものそ

一 落馬の時ハ貴人なとハ何も下馬すへし 自餘ハ下馬
ニ不及也

一 馬場なとにて馬乗康忠ニ付矢を指挟て弓ニ添
持へし結也さらハ又用意し

一 射手其外何時も度々同射今度まてを本度向

両度と言へし馬場中にてハ向と云馬場末にてハ返と云
三度射るハ向返度と云へし

一 弓ハ塗木弓之村出き又ハ拵も黒箆を用るなり

一 的の通又ハ矢数不定にて 弓を落す時も 臺同前
又流馬場末にて一度射ても返へし 弓を落しても矢
中ハ日記に付へし

一 弓を折り又ハ弦切たる時ハ馬場末にて 張替を渡して射替
急し又打入る節にて 矢折る時ハ馬場末にて射替へし

射手中に失人有ハ 下馬して水口を取 弓を射替て

射手中に貴人有ハ下馬して水呑をかき弓を立留て
家色し引目をハ貴殿の人ことを馬上より立留へし
歩入之所にハ何方にてもと立留へし

一　百番の晴矢手をハ何れにても何れもと矢行あらて射さる
ときハ歩借て一つ射也

一　百番の冬懸ハ毎度十度目に馬より下る度矢本式之
又二十度射てをかる二十度つけてハ射へて後馬にし
家習射ハ何れもと馬場本にて家色之也

一　百番の笠懸を射ニハ馬一疋二疋ニてハ通しかたし
何ヶ度も乗替て射へし

一　遠笠懸と云事物語ニハ唯笠懸と云遠の字ハ
深き習有秘事成由見ゆ

一　君の胡ニ乗て流鏑形的の前迄の事をつゝも射へし
如ハ色ニ

一　七所勝負笠懸も十度射果て上三度下三度ニ
寢をも立へし勝負の志てしニハ九ニ点を懸て各射
果て惣の中ニ一度懸物を兼て定置へし

果て惣の後に一度なすり掛物を兼て定置へし

一 馬場にて酒あらハ射手并流の的の取りたる後にて飲へし其中に貴人ハ馬上にて飲給ふなり卯人ハ下馬して水干を脱左右の肘にかけて飲候て馬をハ馬場本迄ひかせて其後に挟捨をさして馬場本にて馬に乗候さなり貴人馬場末にて何れも下馬して飲てやかて乗へし馬場本同前也

一 怜(ケヒノ)懸の笠掛ハ馬場本の扇敷と的の中程より女

的の方へ向きて弓手の方に懸べし 何本なりとも地より
上弓と的との長さに立て一本に枝を四つ残して奥八つを二宛
股を合せより餝へ穂の有稲なりとも蒿なりとも掛
置し四つ枝に懸べし 何奥なりとも上着なり

一 鳥ハ一つ宛皮なくて四つの枝に射て鷲の鳥のとりして
頭を上へなして懸べし

一 鹿ハ四つの股をおろし尻の方を上へなして一つ宛つらね
又脇をあけて皮又ハ縄なりとも懸べし

一 應永十三年七月廿七日於諏訪祝左衛門尉の馬場に

一寛永十二年七月廿七日於諏訪神事犬業跡の馬場ニ
ありしく検見の笠懸十度ありその時の射手八騎也
此時奉行の射手ことに日記ニ付也ニ付しるしる
ありしにつけてかくしるす事也 射手たるへき事也 但射手ニも
絶へさる程の射手ニ必射手たるへき事也 縦頼之所
射手ニあらなくとも頼之方より射手として十八ニの射之
者の人もまかせてさる事も可有之也

追 笠懸中巻終

一 射手検見装束の事 烏帽子直垂又ハ狩衣大紋ハ
素襖袴可穿次拾水干行縢入子ハ弽又ハ小笠也
人ハ小結ゝ置候こと有之肩衣事口傳

一 検見の射手同前但直垂又袴を穿之

一 晴日競射ハ烏帽子素袍袴を着し検見射手共二人連而
検見西方より出之

一 検見検見の席而出 矢代を左振射手の一番二番の
次第を定馬場中の数塚の側而来之

一 晴の日検見を出馬場末の数塚の前而居也

次第を定馬場中の数塚の縁にあるべし

一 射終検役を出馬場末の数塚の邊に居也

一 射手各小屋を出縄際の其の上に別居し検見射終て

式躰あるべし

一 射終矢代をとり射手の名を呼日記に注し次第〱に

渡すべし射手矢を検見に渡検見矢を取て数塚に

指出小屋に帰る射手ハ矢渡をとり合一同に出小屋に帰る

射終矢代をとり検役に帰日記を改的に向居るべし

一 検見小屋の前にて馬に乗馬場へ通る射手も同様に

次第〃ニ出張を出る也

一　射手馬ニ乗所ハ座ニ於て外ニ出て乗来ニ式礼して弓を持馬立所より流を一通乗廻之時的を一目見繕支度之

一　順〃ニ乗廻して射手皆のこらず一番二番と次第〃ニ馬場末ニ扣總射手乗廻し仕廻て射一番の射手馬場末へ乗廻し馬立所へ出候ニ付扣時二番目の射手より馬場末のごとく馬場末の後ニ扣候次第〃ニ出入射之

一　射手馬場の後ニ二番之番〃弓を立てる射挟尺一弓物

流鏑横ニ通色々之儀有之

一 流鏑と云ハ二人一度ニ射候也先へ乗りたる射手
的前串の見を行て射了ニ跡より少し馬を出して
射る事なり切者程近く又前ニ及て射る事あり

一 弓持候ハ馬の平の間ニ末弭を付て持へし横ニ成し
弓を越色々有

一 引目持候ハ引目を馬の右の耳より前の方ニ持へし

一 射手矢用候ハ馬通下ニて用へし前ニ云前ニより下ハ

矢を用て馬場中へ乗入へし思ひ儀なましてと置之

一 射手矢用候ハ馬通ニ而て用へし乗懸ニ而ハ…

矢を用て馬場中へ打入へし畧縁かまはしと云是

一 弓懸へハ引目預鳥帽子欹の色の高サ引て而立へし

引目鹿ハ身のまへみへ向也 弓を後へやるハ悪し身通

しより前なるへし

一 矢放候ハ引て起りて押手を失的の方へ向ヶ居て而

しく馬ニ落るも後串の通へ前足を入るるに

て放へし手縄をもちさきハ射放身るまま而も放へし

弓のうしろへハ悪し

一 的をゐるハ押液して三度之余出して一度弓を打起
さ反ニ一度放して一度是を三度の目と云之

一 わきより矢看して(と)きハ矢中一尺絆を物的の方へ二度
振わきりを前後腕を合せる時肘捻尺馬を共
余出し射手ニ向ひ腕を振わきりを知之

一 手綱ニ取てハ身ニ添ぬと悪し又前へ出るも之悪し
流へ打入て前を出してより之を通さなり手綱
萬し口伝

一 鞍ニ之肘と腰をも之鐙をさし胴の内ニつま膝と云

〓之口傳

一 鞆ニ之附と腰を先へ跪せとさし胴の内ニつけて膝をたて
まも尻の後輪ニあてる便ニして腰より上ハ直なるへし

一 力革笠懸ニハ短かくし犬ニハ長きか能也 二寸も
長く写ハ短し口傳

遠笠懸下巻ニ記

遠笠掛矢代之次第

一 検見様ハ矢の前ニ出矢代圍をとをして矢代ニ行下

矢代ニ渡シ拵なさえ一番より五番迄の次第を定
先馬場末の数塚のもとニ扣候ハ馬場本の数塚
のかたニ扣居之 （上古ハ此式の沙汰ハなかりしよしなり）

一 射手各小屋ゟ出的の前笠の席ニ並ひ蹲踞揖足
畢て射手ニ向ひ礼あり射手各一同ニ礼ニ応ず其後
畢て上矢代ゟ各訖一訖二訖三訖四訖終て射手の名を
呼次第くニ目録ニ認候くニ射手ニ渡ス各受取く
名を呼尾数塚ニ揖出退下矢代家開

済ニ上矢代ハ右下矢代ハ左ヘ以

侍ニ上矢代ハ右下矢代ハ左ニ候

一撿見各射手ヲ引連小屋ニ入リ幣束ヲ取さつけ候ひ
假屋の前ニて馬ニ乗リ撿見より次第くニ埒ニ乗入也

右一巻雖為秘事依御懇志
染悉記進之候不可有外見
者也

小笠原大膳太夫　長時

小笠原右近太夫　貞慶

岩村意休　重久

小笠原河内　知成

三原八左衛門 宗宣

水嶋卜也 之成

横山三郎右衛門 時連

早川茂右衛門 爲逢

原田傳内

寶暦十三癸未年八月

村田小平太

信岑

津村佐次郎殿